別
6
4

6286

て呉れろ。」と言ふんでせう。機械も故障も出、来たのかと思つて理由(わけ)を訊(き)いて見ると、此の船へは普通のお客様(あかた)は乗せないと言ふのです。」

「普通のお客様?。どんな事なんです?。」

「あゝ、面白い言葉でせう。東家君(とうげんくん)は其の言葉が癪(しゃく)に障(さわ)つたと見え、普通のお客様を乗せないで誰を乗せるんかい!」と呶鳴(言)つたのです。」

「宿命」(鈴木泉下山田鏡)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別
6
4



込んで了つたのです。東京君は其の男の顔を見た時、大声で、「何故我々を乗せないんだ、理由を言へ！」と叫喚すると、運転手が車を急に停めて、「君は下りないで頂戴やうに言ふのです、しかし東京君はなか〳〵降りない大声で佐賀とかいふ男を罵倒してゐました。しかし幸ひ



冊を借切つたのですから、何卒次の船まで待ち下さい」と言つて頼むやうに言ふのです。しかし其時は最う遅く降りて居たのです、しかし東京君はなか〳〵降りない大声で佐賀とかいふ男を罵倒してゐました。しかし幸ひ

家君を宥めるやうに、「今日は鎮通院から宿長さんがお出でになつたのですから、何卒次の船まで待ち下さい」と言つて頼むやうに言ふのです。しかし其時は最う遅く降りて居たのです、しかし東京君はなか〳〵降りない大声で佐賀とかいふ男を罵倒してゐました。しかし幸ひ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



に甚所へ巡航船が一艘入つて来たので、私達は夫れへ乗つて帰つたのです。夫れから僕は翌日直ぐさんを訪問して串本尾の妻さんの話や其君との噂り合つた事を詳しく話したのです。僕は何の気無しに面白可笑しく話したのですが、直子さんは甚く感激して了つて本に〳〵と涙を零しなさるんでせう。

「どうなすつたのでせう？　夫れは、……」

「夫れは僕にも解らない、がしかし大体は



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



拳しられる、申本れの妻さんか、亭をは気んなと思はない、矢張り海の中で無事に生まて居ると思ふと云つた言葉が貞子さんの神経を非常に刺激したらしい。夫れから貞子さんは佐栄という人の車ん就りて私に斯んな事を話しました。

《此の頃あなたがお出でですか、お帰り下さいまして手紙で申しだで玄関からお帰り下さいまして手紙で申しだで せう、あの時は佐栄さんがお出でになつて居たのです。》

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

別
6
4



息子さんは夫れ丈け言つて暫らく黙つて俯向いて居られたが、とう〳〵一時間ばかりもかつて私ん佐平さんの事を詳しくお話しなさいました。夫れはつまり佐平さんが若い頃、息子さんのお隣りに住つてゐてさんを知つて居たとゝふのです。甚の佐平さんは品(も)行(立派な裏表もある)方正な人(孫もある)で今ですが、息子さんの所へ来て居ても随分(から)窮屈な事を言つたのださうです。子供二人の教育を引受けてやらうとか、然う(さ)云(ゐ)つた身体の



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



方ん悪いから遠方へ旅行したら宜いからーと
か、夫れは佐多さんは財産家かし立派な紳士
ですから決して卑劣な心根から甚様な事を言
はれるのでは無いでせうが、夫れが又た貴子
さんの心を非常に刺激したらしいのです。畢竟
(つま)
(ひれつ)
(えん)
(しりぞ)
(しま)
(さ)
(ひる)
(しょう)
(ひる)
(しょう)
(ひる)
(しょう

別
6
4



臆して、「自分はあなたの一家を本
当に清い心で同情して居たのだが、そんな
誤解されて排斥せられるのは情ない」って泣
き乍ら言はれさうですよ。君からもよく
その佐東さんは今まではおつた寂つた牧師
さんやお子さんのやうな方のださうです。
和佐東さんって云ふ人は真子さんを愛して居た
のでせうか。夫れとも芳情の爪を磨いで居たのでせうか。
四夫々は償には解らない、佐東さんって云ふ人
は旧来君と交際もして居たらうし、どんな甚

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



の遣(つか)いに同情して甚(そん)様(さま)な親切(しんせつ)を言って呉れたのかも知れない、しかし貞子さんの執(と)られた方法は賢い致方かと思う。已(すで)に清い(きよい)

日本育ちの佐子さんに甚(そん)様(さま)を望(のぞ)む意(い)が有(あ)つたのでしたら、夫(それ)を退(しりぞ)けるは可哀相(かわいそう)でせう？已(すで)にいゝえ、僕は然(さ)う思(おも)はない、人間という子ものは然(さ)うしたものでない。明(あ)けて言(いへ)ば僅(わづ)かつて然(さ)うだ。此間中から貞子さんの方(かた)が、深(ふか)く考(かんが)へて全(まつた)く没頭(ぼつとう)して奔走(ほんそう)して居(を)るのを見(み)れば此(これ)も一種(いつしゆ)の戀慕(れんぼ)だ、妬(ねた)う言(いへ)ふと直(すぐ)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



あなた

妻女は「下らない！」と仰しやるでせうが、僧な自分を甚の下らない人物として観る事が度々ある。総て人間と云ふものは心の戸を全く打開けて話し合ふ程度の交際をする時、も う夫れは一種の恋愛だ。佐多と吾妻の関係から宮さんの妾をしようと云ふ事た所で、いつしか夫れは普通の恋愛に変って来る。宮さんは丁度串本の妻君といふ人が千ヤアンと心の中に生きて居るやうに、旧主人のやうに、宗

別
6
4

も、心の底の底を叩いて見ぬ、決して田辺君が此女から消えてうつれとは思はないのであつても同情であつても佐野へ如何に親切であつても、其所へ如何に親切であつても佐野へ如何に親切であ

別
6
4

それとも
若い男の作家
と云う男が、本当
に つまらない男で あ
って、貞子さんは
そんな 話ばかり
事と 聞かされた
以上、一日も あの土
地に 居られないと
思う程 悩んで
死のかも 知れない。

るのは貞子さんには堪へられなかつたのでせう。僕には(どうも)深い理由は解らないが、一ケ月程前に貞子さんが初めて来て、一音無さんと、私に、五六年の間全く足さんにそんな事聞かされた事ないから驚いてしまつた。言語道断です。その時、僕はありませんでせうか。」と言つた時、僕は無言の言葉が意実貞子さんの心(しんそこ)の底から滲出した。

まのかと思つた。で、早速神戸へ行つて伊賀君とも相談し、此処(ここ)へやつて来たのサ。」

音無は小い溜息(ためいき)を洩して靴の上を凝(かつ)と見



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6
4

697

読めて居た。

「少うし私にも点るさんのお心が解つたやうですワ。」

お田は起上つて軈く膝の所を掩ひながら、「では、アがネス伯迺院へお入りになつたら如何です？」と言つた。

「アがネス伯迺院？　あの芝の？」と

「えエ、舩所は此度葛様な境遇のお方を収



容—てやさるでせう？」

「さうねえ、では今日帰りかけに一寸立寄

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6
4



つて見ようか知ら……と。

「何(あすこ)の院長と……一たい あなたは承知でせう、彼の松本時子さんと云ふ屋敷(やしき)しやいますよ。私、松本さんは御存じたり。」

「勿論(もちろん)さ？　時子さんと僕は不可思議な響を聴いてやつた、ギツ！　として本当の話を見上げた。

冴(つめ)たい風が二人の間(あいだ)を吹いて公園の常盤木(ときはぎ)からかがり〳〵と揺めいた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別
6
4

499

指

十三

岩白

十三枚

通計千百四十七枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別
6
4

5006

告白

「本當に能くお出で下さいました、私、心から御禮申しますわ。」

時子は叮嚀に頭を下げた。

「僕も石塚君が早速來て下さつたのを嬉しく思いました。」

音無は菅地と石塚の顏をチラと見ながら言つた。

「私は卅波の方へ聖書販賣に行つて居たのですが、丁度豫定の行事を了へて伊賀君の所在

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6
4

5.1

へ戻って居たので、音無君の電報を受取ると直ぐ出發して来たのです。」

覚也は左の指で額を撫でながら言つた。

「私の身の上から申上げますが。」何卒音響さんも石塚さんも虚心平氣でお聞き下さいまし、私、大膽に申上げますから……」と暫しは例の如く口をすし傾げて、膝の上で揉手をしながら、「私、赤島温泉で石塚さんに一寸お話し致しました通り、亡くなつた堅雨さんと



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別16-64

5-02

結婚の約束は弘しました。しかも戸籍上の手
續を弘しました。たけど私、夫婦とは遂う成れ
なかつたの。幼馴染の堅ちやん時代を想い出
して甚うちたは學校も出来、愛情も起るだら
うと思つて居ましたのですが、ところ〳〵幸か
不幸か私は堅爾さんに身も心も許す事が出来
ませんでした。由良さんの家出をなすつた後
で私は吐嘗せうれて東京から新宮へ参りまし
た。そして太地家の財産を悉皆私の名義にし
て了つたのも事実です。彼の場合あゝした處

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別
6
4

5の3

罪を犯すのは本当に没義道(もぎどう)のやうでございますが、しかし、私一人が悪者になれば宜(い)いのだと思ひまして、あんな非常手段を講じたのでございます。現在血を分けた実子に財産を譲らないで嫁の名義にしてしまったといふ事に就ては、本当に何(ど)んな誤解を受けても致方が無いのですが、世間では単に旧泉さんとの関係をごまかす(ごまかす)為めに、彼んな奉仕な事をしたと思つてゐるでせうから、それには辿々しくつて、つまらない事のです。私と堅爾さ

(東京地下出版)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1
60
4



んとは諏訪温泉場で結婚の約束をしてゐました。そして本地のおい女さんも京都までお出でゐすつて吉田敬爺(ひなが)さんのお姿話で、昨日私は直ぐ東京の方へ出立(したた)めでございました。世間の人達は結婚式といふ形式と結氷的の夫婦になるといふ事とを混淆(ごちゃ)にして考へて居なさるんでせう。私、夫れを大變な間違ひだと思(こちら)ひますの、で、私は式は擧げたが其儘東京へ來て圖書館へ通つてゐましたのです。所が一週間ばかり

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
4

505

経つておツ母さんから悲しい手紙を受取つたのです。其の手紙には――結婚式を挙げて置き乍ら夫と別居すゝといふ不自然な事に対しては、自分も大変反対ではあつたが、夫れは大変宜い事であつた。あなたが東京へ行つた後で、堅雨と自分と二人が同じ室に寝てゐると、夜半頃に堅雨はむつくりと起上つて、四白い者！　白い者！　と恐ろしさうな顔付をして言つてゐた。堅雨の父親は二十八九の歳から失明やかされたのであつ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別1
60
4



あの子事件のあった所へ堅尾さんを置いては

た。そして遂には何にも言はないで黙り込んで了つた。堅尾も可哀さうが親の造作で、同じ病気に罹つたのだ。」と云つてゐる意味が書いてあつたのです。しかし私は軽度の神経衰弱な位に思つて軽く手紙を読んで慰めてゐました。所が突然田室の家出事件があり、私がすぐ碧家へ喚出されたので、和州へ帰りました。おつ母さんの観察では、どうも尋常でない点があるので、私は直ぐ彼の財産の処置を付けて上京したのでした。おつ母さんの

（暫くの間家を出て奉島温泉に隠れて居る）



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別1.
60
4

5.7

死ぬ前には

お話によると、亡くなった父親というのは随分（つか）放蕩して故らしたらしいのです。堅雨さんの病も此度（さ）迄うなるならうとは云うものの、萬事お母さんの指金（さしがね）でまの名義にしてしまったのです。夫れから或晩堅雨さんは、おツ母さんのお宮（やしろ）へ入（はい）って行って、今に此の町の人達が押寄せて来～僕を濱トリ引張って行って仮叩（ふくろだた）きにする！ッて顔色を變へて言ったのださうです。おツ母さんは仕方なく夫を介抱なすつた経験がありますので、葬儀（そうぎ）ナオミさんと共

葬儀な事があった後で直ぐ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



絶望さんとを暗い所で暫く静養するやうにと申して旅立たせなさいましたのでございます。

其後堅爾さんは京都で暫くおいわ婆さんと一緒に暮して居ますうちに病が、どうしても病気が思はしく無いのですが、勿論他人様には堅とも男らないのですが、時々変な事があるので、昨年の暮にとうとう思ひ切つて根岸の病院へ入院させたのでした。病院では毎日農業解剖の書物を飜譯して居るので、看護人達も何かか病院の事を研究にでも来てゐるのかと位



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



れこれ思つてみなかつたやうでした。私も時々訪問してみましたが、甚の酸鼻を極めて見ますと殆々〳〵慨然たるなつて行くのでした。

入院の当時、院長さんが二ヶ月も居れば全快するからうと申すのでソレ(退院しても)私だけは堅雨さんと病院へ通院致すつもりで同居しますまいと思ひましたが此所に踏りで住つてみたのでございます。

堅雨が所が堅雨さんは……堅雨さんは遂う(とうと)病院で亡くなりました。

遠かんぱ(さ)ほうはおロりとして寂(まつむ)向き込んで了(しま)



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



つた。吾無も覚也も、時子の言葉をす方疑ふ餘地は無かつた。

「もう甚様(そん)な悲愴な事があつたのですか、」と吾無は太息(といき)を吐きながら言つた。

「ちつとも知らなかつたもんですから、」と覚也は腕を拱(こまぬ)きながら、眉間(みけん)に縦(たて)の皺(しわ)を寄せながら、深く深く考へ込んでゐます。

「私もどうぞ幼馴染(かさななじみ)の堅雨さんは奮して上げる事も出来ましたが、大人(おとな)になつての堅雨さんは奮して上げる事も

(縦二〇糎×横五十山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4

517

も出ませんでした。夫れは本當に私に取つても堅雨さん取つても不幸な事でございました。けれども、けれども、けれども、ん、私は唯一つの善事を尽したやうに思はれますと、ヒヤしく時子は躊躇して、可そんな遺傳を残さなかつたといふ事は私が北畠に對する小さい貢献だと思ひますの、こんな事は何でも無いやうな事でせうけど、結婚式も結婚届も、濟んでの上に、北畠に對して此の義務を盡したつてゐる事は、私に取つては本當に苦しい



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

512

大きな事業でした。夫の方たは稚んな悪評も立てられ、堅雨さんも氣の毒でしたが、てんな恐ろしい遺伝を有つてゐる人と知らず に軽率に結婚したのが悪かつたのですから、 市事私一人で甚の重荷を背負ひましたノ。し かし、既う私は大地家の財産を悉皆捨子さんのお名前に書替えましたから……。 時子は覚也の死をどこ迄も嘆いて居たが 何を思つたか、ふと立ち上つて連れ添ふ様にして帰つて来ました。

鈴のやうな眼から
涙を流して
林檎の白い頬を伝つて流れた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

517


宿命　十四

法律　第一

通牒　十名　仕十


三十三枚

（昭和十年十一月廿五日印刷）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別16 64

5ノ4

# 洗禮

「おや、時子さん、丁度宜い所でした。今お迎へに遣る所でしたのよ。」

ナオミの顔には嬉事な、ごとがあらぬ事件の發生を暗示してゐた。

「須ちやんがお悪いの？」

「ええ、然うなのよ、風邪をこぢらかして梶木さんが仰しやるもんだから其の心算で安心して居たのですが、餘り熱が冷まないので、今朝東

（第110（横浜坂下三日間））

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4

517

宮病院の高村博士に来て戴いたら、高村さんは如何仰しやるのよ。」結核接性の脳膜炎だから、こゝ二三日の中に意識が朦朧になるだらう。」

と、私、本当に驚いて了ひました。

ナオミは腰(睡)に湯を一杯溜めた儘、暫く上げた。

「大変ネ夫木は、おゥ女さんに其の病状をお話し下すつたの？」

「いゝえ、御病症は少し御気分がお悪くつて今朝からお寝みでおらつしやいます。」



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13-60

516

「困りましたネ、夫れは……家に角私、お母さんもお目にかゝりますワ。」

時子はナオミを玄関に残し置いて裏口へ廻つて行つた。

「おゝ母さん、お加減が宜しくないって、如何でございますか、……心元(こゝろもと)ない。」

元気付けるやうに言ひながら襖を引あけると、

「(丁度)お幸は半身を起して薬を服まうとする所であつた。

「お待ち遠はせ、お湯を汲んでまゐります

(原稿用紙二〇行)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4

517

ワ。

時子な秘もとにあつたユツポを提げて勝手の方へ出て行つた。引違つてナオミが周章てたやうに入つて来て、

「即隠庄様、唯今、音無さんと石塚さんとがお見えになりました。」と云つた。

「え？　音無さんと石塚さん？」お幸は甚の言葉が解しられないやうであつた。

「えゝ、一寸お目に懸りたいと申しまして



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

518

言つて居る所へ時子が入つて来たので、お幸は時子の顔を眺めながら、「今、音無さんと石塚さんがお見えになつたつて？」あなたは首（こうべ）うお曾（そ）れ申しなの？」

「えゝ、今朝程お二人でお尋ねなさいましていろ〳〵とお話を承りました。」

「石塚さんは今何（ど）うなすつてゐらつしやるの？」

「神戸の方で倉民俗（そうみんぞく）をなすつてゐらつしやる伊賀さんと申す方の許（もと）にゐらして、聖（ひじり）

（原稿二〇）（鉛楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別1
60
4



今北の方に御いでらっしゃる御様子でございます。」

「お連者でねらっしゃるんでせうネ。」

「ゆえ、〳〵大変お丈夫で、新宮時代とは異つて円満なお方になお成りのやうです。」

「然う？」と言つてお考へなが、「少し考へねばならない事がありますから、音無音無さんとも出掛けて此方へお通し申して、石塚さんには明朝でもお出で下さるやうに、……お宿はお未に命令けて



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

5 no 1

品川の何所かへ案内するやうたして下さい
ました。
Ⓒ
いは、畏りました。ではは、私、直接に石塚
さんに然う申し上げますわ。
Ⓒ
時子は玄関の方へ急いで出て行つた。そし
て暫くして音無を先ん立てて、お幸の室へ入つ
て来た。
Ⓒ
「先ア、音無さん、何と御挨拶申して宜い
やら！……Ⓒ
お幸が静かに跪を下げた時、「先生！」ナ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別16
64

521

オミ先生！　早くお出で下さい、早く早く！　ムラ
とお末の急癒ましい声が聞えたと思ふと、襖
してがチヤーンと物を投げたやうな響がした。
　四須基ふさんのお部屋！　ムラ言ひながらナオ
こは色を変へて飛出して行つた。時子も周章
て、後を追ふて。お春も吃驚なから後に跟い
て出た。
　四どうなすつたのですか、ムラと言ひながら音
無はお春を扶けながら其の室へ入つて見ると、
四馬鹿ね！　お末は車書に馬鹿よ！　私の

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
61
4



頭に大きな大きな石を載(の)っけたり、針でチクチクと突刺したりするんですもの……」

丑(さ)う言ひながら須基子はトロリとした眼付で蒲団の上に静かに仰向いてゐた。上蒲団が半分ばかり撥(は)ね退されて、水枕と氷嚢とが坐(すわ)つてゐた。

軈(やが)ての隅(すみ)の市に投げられてあつた。

「どうしたと言ふのです？」須基子(とはる)よ！」

お幸は叱るやうに言つた。途方に暮れて居たナオミは水枕を提げて来て、帯(おび)と須基子の枕の下に入れようとしたが、須基子は右の手

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別1
6
4



て弱く去水を撥ね除けながら、

「そんな大きな石を持って来なさるのは何どなた誰ですの？　私を救しなさるお心算なの？」と言って西の手を自分の眼の前で交互に振かして居た。

「先ア吃驚しました事、今、お嬢さんは何自分のお髪をグイと引張りなすって、水松も氷裏もパッ！　とお投げになったのでしたも。茶白くなってプルプル顫へてみたお末は氷裏を提げ（たまり降るの例ん）立って居た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別1.
60
4

524

二行アキ

ロま！　早く榾木さんの所へ行って、今迄
くお出でなさいって言いつけやがった！　早く行ってらっしゃい！　山
お幸は然う言って置いて、須芝子の顔を凝然と覗き込んだ。
一時間ばかり経って医者の榾木はやって来た。脈をとって見たり瞼を引くり返して見たり、瞳孔を叩いて見たりして居たが、ロあーっと小い溜息を吐いて、ロ御愁傷様、一

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別1.
61
4

525

す、、、、、と言つてお孝を廊下の方つ誘ひ出して行つて、何かか密々(ひそひそ)と話して居たが、梶木は再び入つて来て須基子の机もとに座つた。

一座には驚愕(けうがく)と危惧(きぐ)の空気が漲(みなぎ)つた。

四時子さん、ちよいと此方(こちら)へいらつしやい。」と呼んだのはお孝の声であつた。

四は、「と」と小い声で答つて歩いた時子は黙くして(廊下のかからみて)襖(ふすま)を少し開けて(ち)ナオミを手招(てまね)いた。

ナオミの出て行つた後で音無はひつそりと煙(ふる)えながら梶木の側へ躙(にじ)り寄つて小さい声で、



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別1.
61
4



田病名は？と訊いた。
榛木は例にあつた
慶応第一の結核性肺膜炎、
識朦朧。と書いて見せた。
言葉は恩はずギクリ！
りながら恐ろしいものでも見るやうに須美子
の顔を覗いた。須美子は頭
で動かしながら口の中で何事かを呟いてゐた。
醫て高村博士と一緒にやつて来たりお幸もナ
オらも一つて来たが時子かけは見えなかつ
た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別1.
6(
4



博士の診察では、二三日異常は無からうと言ふのであつた。喜惣は安心したので、六時頃に本地の家を出て帰りかけに覚也の宿を訪ねて見たが、本地からの使で唯今出て行つたといふので、其儘富士見町の須野の所へ帰つてみると、貞子からの明日立つ、といふ電報が来てゐた。

翌る日の午前十時にはアグネス病院の院長ミス・イーストに面会して、貞子等親子三

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

528

人の車を頼む筈になつて居たので、音壺は九時前に渋野の家を出た。

ミス、イーストは非常な好意を以つて快く（行つて呉ると）（こゝろよ）三人を預る約束をして呉れたのみならず、

「お嬢さんと坊ちやんとだけは毎月十円づゝお出しなさい、おツ母さんは筆耕を研究なすつたり音楽を習つてなすつたりして専心に勉強なさい。お金は少しも要りませんから、」

と言つて呉れた時、音壺はおもわず（から）

を患苦却して教つてやつた嬢しく感じた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

「夫れでは本人が参りますと、一度私が三人を伴れて参りますから、……」

「いゝえ、あなたがお伴れ下さらないでも（信濃町の叔母）電車さんと仰しやつて、直ぐに（すぐ）ドシ〳〵お出で下さい、贋（にせ）の電車さんはありませんから……」

イーストは人の善さそうな顔をして笑つた。

「有難うございました、何分宜敷……」

音無とイーストとは母子（おやこ）三人の居あ

に神の祝福を祈つて訣（わか）れた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13-60



音無は甚う足で直ぐ左地の家へ行つて見ると、玄関には二足の靴が脱かれてあつた。

「御免下さい！」と周章て、言ふと、内の音無さんですか……」と答へながら出て来たのは時子であつた。

「どうです？甚塔は？」

「いけません、今高村博士が診察してゐますのよ」。

「然う？夫れはいけませんね」。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4



音無は時子に導かれて病室へ入って行った。甚所(そこ)には覚也も来ていた。枕もとに坐ってみた博士は、

「暫く様子を見た上で、食塩注射(しょくえんちゅうしゃ)をして見ましょう。マア綾乃が意識があるやうですから、お言葉でも掛けたい所希望の方は掛(今のうち)けて御覧なさい。斯んな事は申上くさき事ではありませんが、一山と云って元の室へ起(た)って行った。

ナオミはポトポトと涙を流しながら、「須(す)

(横二〇)(縦六下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



うちやん！　須(す)うちやん！　私(わし)かわかいてやー。」

と言ひ乍ら敬子嬢(けいこじょう)を覗き込んだ。」

「古座ナオミ先生……先生のお髪(ぐし)は綺麗(きれい)ネ。」

「須(す)ちやん、茎子(くきこ)！　あゝ、わたしは……。」

「大事のゝ　お婆アさまだけネ……。」

ゆさうか、ゝ、能くミつてお呉れだ。」

お幸な涙と飽迄みなから須茎子の右の手を

取つて二三度振つた。

音響は覚也(かくや)を伴れて来(き)て枕もとに坐(すわ)らせた。

「須茎よさん、此のお方を御承知

別13
60
4

503

ですか。」

音無は覚也の肩に手をかけて揺りながら涙声で言つた。絹茎子は可愛い眼を瞬つて、

「石塚さん……新聞社の石塚さん……」

と細い声で言つた時、お幸は急に立膝をして、

「絹茎子！　甚のお市はネ、今日から太地覚也さんなよ、太地覚也さんなよ、わかりましたか。」と言つた。音無もナオも思はずお幸を振向いて見た。しかしお幸は正気であつた。

「太地覚也さん、……イ……ヤ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4

534

須基子は廻りに四圍(くるり)を見廻すやうにして、
両手で眼の前の空を摑(つか)んだ。
「須基子！　太地覚也さんがよ。此(こ)と須基子(すきこ)は
の市ん会を押して置いて、お幸は
たは未(まだ)ん経(たた)く来てやつて下さいました。もう二三日も遅(おそ)くなれば、此の娘(こ)は既(も)うお嫁を見あける事も出来なかつたでせう。私(わたし)は、あいは是(ぜ)非(ひ)(なん)にお約束申した事を決して、及古(ほど)に
は恥しません、あなたは約束の日から最う太地覚也なのです。今、須基子の口か



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

534

ら唯ソタ一口でも「大地覚せさん」と言うた
だけで何卒私の約束を果したものとお思て下
さいまし。たるのはり何卒、あの眼も忽もな
い須基子を妹かと思つて、何卒妹か姪か
なと思つて、断末魔を見届けてやつて下さい。
ね、覚せさん……最う名塚さんとは申しません
まい、……あア、私も三十年来随分苦しい
目に会いました。しかし……
お寿の声は震つてしまつた。一座は皆な俯
の中に涙を湛めらみを。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



一行アキ

口どうもお氣の毒かか、いけないやうです、しかし最早すが書すかけは書しませう。」と博士は食塩注射をする為に須基子の雪のやうな白い胸を披けて小い脱脂綿の断片で右の腋の下を拭き初めた。一同の視線は柔く須基子の躰に注がれた。

小い精口を伏せたやうな可愛い乳房から、プ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



クリと膨れて、清かつた十六年の生活を物語つて居た。

博士は二本の太い注射針を無雑作に皮下へ突刺した。そして握木の方へ合圖をすると、握木は恐る〳〵二顆珠を握つて、空氣をユルベンへ送り初めた。

覺也は音聲とお常との間に堅くハンカチーフを握りメめながら須基子の白い胸を見詰めて居た。時子は覺也の後に坐つて其の背に額を押付けながら慄り泣いて

(東京一〇)鈴柴笠下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4

537

おた。

護謨管を傳つた食塩水が繻子の皮下へ通らんのを見た時、一同は堪へ切れないやうな顔付をして博士の所作を凝視した。

たが、梳木の手にして居た二聯珠の握りやうが厳し過ぎたと見え、ホウーン！と短銃を射つやうな大きな響きがして、コルベンは粉微塵に砕けてしまつた。

けれども繻子の開かれた眼は開かれないで、苦しさうな息使ひが依然と一て室の外まで

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止



も聞えてみた。

「注射は餓ろ麿しませう、十分廿分の生命を延した所で仕様もありますまい。」

顫えながら冷酷に言放つたのは喜美であつた。博士はいく眩鏡きを

「遠方から此面会にお出でるお方でも此様いますならば……」と言うた。

「いゝえ、誰もありません、ゆうやア、先生最ろ

〳〵声で言つてお事は、

(子の)

重篤な此の生命は何うたも仕様がありません

別13
60
4止



のでせうか。」

「確實にどうと言ふ事は申されませんが、今日の私共の有つてゐます智識では、此上食塩注射をしたら半日か一日の生命を延す事が出來るからと申上げるより外ありません。」

「解りました！」と、お幸は深く點頭いて復基子の顏を見詰めたが、其儘崩れる樣に泣倒れてしまつた。

「音吉君！　繪基よさんはマア洗禮を受

原稿用紙 二〇（東京築下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4



ケて居なかつたのだ。息あるうちに按洗(じゆせん)して
あげて下さい。」
覚也の声に励まされて音無は頭を擡(あ)げながら、「御隠居様、御免(お)文はございませんでせうか。」
「此の娘の両親の行つて居る所へ此の娘を遣(や)つて下さい。そして私にも洗礼をお願ひ致しませう。」
「ええ、御隠居様も？」
「ええ、長い年月、私も隠れ切支丹(きりしたん)を頑固にして

■第二〇（鈴木版下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



豊のやうん

無実劾で居ました。私も須基子と一緒に洗濯
を手伝ひます。」
ナオミは勝手えん走つて行つて、硝子の皿
へ水を盛つて提げて来た。音吾は矢つお爺に
洗濯を掛けて、夫れから須基子の枕もとに坐
つたが、皿の中に涙した右の手の別れ
顫へてカチカチと歯が
が聞えた。
父と子と……聖霊の名により……
子に洗礼を授く……



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4



途切れ〳〵に辛うじて絞まで言い得た時、須芝子は石の手を少し動かしたと思うたが、両の眼をパッチリと開いて天井を見るやうた。

した。美しい額には洗禮の水が走ってみた。

覚也も時子もナオこも額を一所ト揚めて、

の須芝さん！　須芝子さん！」と呼んだが、

、何の返事もせずに又た眼を閉ぢた。

五分間程同じ呼吸が續いたと思ふと、何か

に驚かされたやうに一寸眼を見開いたが、後

かた呼吸の摸様が変つて来た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4

S47

「高村先生……須美子さんが、……」と、オミは泣きながら叫んだ。「池の家から駈け込んで来た博士は須美子の冷たい手を握って考へてゐたが、

「どうもお氣の毒さまですが、」と言ひながら一寸眼を引開けて瞳光は全く開いてゐる。

「……」と呟いた。

「あ、須美子……お前は最う死ぬのか……」

お書は須美子の肩先に膝を突つけて泣いた。

「石塚君、最後の握手をしてあがなさい。」

(神楽坂下山田館)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4

マ外息あるうちに……と音無は励ましやうれ泣うた。

覚せは何も言はずに須基ふの右の手を堅く握つて凝然と其の顔を見詰めてゐた。

「須うちやん！　大丈夫の永い間、能くお聞いて下さつたのネ。須うちやん！　天国で待つてゐて下さいネ……」と

ナオミは左の手を握つてゐて、ホロ〳〵と須基子の胸の上に涙を落しながら蒼白い美しい顔を眼き込んだ。

呼吸は一刻一刻と薄れて行つて、とう〳〵

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4

微かに頭を動かしたと思ふと、

「あ、最後です！」と博士は音響の後から言つた。一同は死んだ人のやうに、ピタリと！と一時に静まり返つた。石のやうな冷い沈黙が室内を鎖した。

我等の心強し、最も頼ふ所は身を離れて主と共に居らん事なり！！！！！

音響は哥林多後書五章の八節と明瞭に諳誦した。

（謄写）（株）静栄社下山田製

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

三十字詰
九行

9ぱ

富本憲吉氏より暑中へ
春紙の藁は本年夏、大和伊賀の国境に近き
一すじた高原にて刈見致し候藁にて、気候の
関係にて花は稔ろうつむき咲けるが多かれ
候。小生の村より僅かに四里、山へ登るため
にて気候もちがい、又花の有様から彩すら違
ふ事甚だの所謂宿命に近からんと思はれ、一
気た描き上げ候。

裏の雪は先日釣魚に参り候節、小生唯一人
寂しき川岸にたゝずみ候節、西の空に沒る如

5-11.

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4

く飛びありし白雲に有之候。それを不圖見上げし時、小生の心中に一種の宿命的感じの去來りしを以て裏錄と題し候。因みに拙様のモテーブはロサワアザミと申す由に候ふ。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13
60
4止

# 沖野岩三郎著作集

## 渾沌

本書著者の大膽なる自傳の第一期
宅價金壹圓四十錢・送料金六錢

山岳社版書房發行

第壹篇 口生を賭して 第五版 宅價九十錢 送料金六錢
第貳篇 口山 說 若さいのち 第三版 宅價壹圓八十錢 送料金十錢
第參篇 口童話某能野詣 第三版 宅價九十錢 送料金六錢
第四篇 口日本に於ける基督新教の總斷面 近刊
第五篇 口煙 未刊
第六篇 口自由か宿命か 未刊

發行所 警醒社書店
印刷所 秋田活版所

BONSHODO PRINTERS AND STATIONERS
文精堂印刷所
文精堂支書店

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

BUNSHODO PRINTERS AND STATIONERS
TEL. Nos. 1584, 2569, 3357, 1360, (KYOBASHI).
町会新區銀京市京東
部刷印堂祥文
番七五三二 銀京話電
町丹入區銀京市京東
部具文堂祥文
番四八五一 區橋京話電
番九六五三
◆ 謄印版石版活 ◆ 簿帳洋洋 ◆ 印刷製圖 具用務事 ◆ 具房文外内

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

# 宿命

## 第一章　恋愛観

一、左(ひだり)利き雄という男が肺病であるのに若い学校出の淫奔な従妹を結婚したが、淫奔は須臾(スキ)もじっとしていることを知らない女で直ぐ肺病で死んでしまいます。

利雄は妻の死は自分の手で殺したのだ、自分の無智から結婚したためだとさとって、淫奔な女とは二度と結婚はしまいと決心します。

（原稿用紙二〇〇字詰）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

彼女はその学校の校長の主宰オコトと
いう若い女を宗教学校へ入学させ、そして傭って夫れ
に任して教育を執んだ、
利枝の母はお幸という二十八才で悟空という
一人暮しの女、
利枝の弟は大伴堅雨（おおともけんじ）という
これは利枝の命で宗教学院へ入学させ、卒
業しても国へ帰らず東京へ留まって
まう。
お母は長男には国と家の事を気にかけ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止



次男は主因つ行なってしまい、孫は家庭学習に専念れて休んで居ります、しかし授業は個別の姿勢かで自分が学ぶまで教えたのかと思って予め破壊しの事。

二、到底は死にます五、世の普通云には大地主は不動産をもたぬ子と一ってよりました、

三、堅面はアメリカから帰りましたし、それともナオこのナオことの経済が初まりましたし、参校の重い荷物なけないと一って抱みました、えしてお地余をもらーと思うが スキみが この意ちを せります、

別13
60
4止

四 針谷の叔父 音無 拓のお七 堅剛とは白金学院の同窓
でした、旧来トクトンの秘蔵っ子サセットとみ好きの
沢音 石塚覚也も 末注意の十オこも 皆な 同じ学校
出ています、四人は時々会合しますし、
そこへ九州のらオハミナ女学校出の 松本好よとてふ
連客の若い美人が出てきます。

五、時々は美人です、石塚覚也(ひろや)に
習うん行って取る数めきます、覚也は うっかり 自分を考し
て居れると思って 手をおしますと スルリと逃げられます、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

六、音聲と同時トクりんとは元金のほ在をしてみます、
より砒のおくに吹班揚は松葉とよ利砒の患僕によ
つて陰現されてゐるのであります、11元金をあわ
音色は片手流(みだらい)の僕で元金と物陰りを一て深く自分
り思想の浅音を持ちます、元金れ、全体が八ケ
とおした行く法をきいます、主流なを多く使をを少さ
にまかつて元金のカねへ全体が行く、英智をは八ケ
より転用なと味きます、
元金の中に二人の湯子之が居すた、強と見れな大
れは音色の声能上の実父の指導とまります、

(鈴楽坂下三田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

四年と言ゼロ「天、母、」と言ふ事について考へます、

七時まと言ゼロとは一夜を寝をします、そして言ゼロと時のの事の風が吹きかけるか、時には安楽的考をもしました、女の心と童心の一つになる事が感じとれます、肉体的には第五とも言ひました、男は童心のはは美しさが童心を捨てると直ち邪心なるとこれます、二つは強弱し別かれます、

八、ナオミは昭和との縁談を破談します、ドクトルは右地氏の財産と考へなおしします、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13
60
4止

人、時子は旅とします、堅雨と仲良く暮れます、
そして幼馴染の二人は千江千子と敏山、行くれん
なります、二人共大阪で知名の士階で朝まで愛を語りま
す、時子は美女を我を忘れ(パラビヒホム)きました、
翌日敏山と空って来の信号依頼に行きました
なつ云が昭雨はビールを飲んで酔って寝ます、昭かあい
そ次の時子は居ませんでした、

十、音子は物知り行っての帰りに大阪で同窓で殺者
をやって来ます、音子に来ます、時子にもあります、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

芝の結果、富本は先ず四の治郎吉と
とを率ゐて新宮へ行くことになります、時子が指先を
引き作り果て、
富本一座は、巴屋ドサトンの斡旋サンセットの紹介で
二十七日を割を演じました、許か王と混捧とか女を率ゐ
は私が案ずるとて聖書から千歳さんとは二十七の珀堂なります、
迎へ巡行人と斡旋記者とは一人考へてゐます、姉は妖
富本は一座を解散して
なを廃して仙境のごとき時が早過ぎた名残
子を喰ます、姉みな富本をも口説きみたが富本

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

は恐ございませんでした、

十一、時子はなおもまる座中名ゐで、盛井と千福井の
牧師さんなどを、二人は古郎忠の二階で寝ました、
時子は淫らな女の心と美しい幸福の心とを抱きそして
愛の戦ひをしようと云ひ、盛井は自分は信いから云ん
なことはできないと云ひ、正しい二人は一時間まで語つたが、
盛井の忠実に時子は圧服して、今までの過を悔ひて
ゐ、盛井は時子さんと云ふ名を呼んで帰ります、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

十二、時子は　堅雨を　家政婦の　ようにぽんしたりを　頼んで　仕事を　しています、で　長い　〜　手紙を　やります、

十三　時子は　高の山鬼の　孫の　研究を　して　おります、

雪の降る　日　堅雨は　迎　踊します、二人な　学問の　話を　毎日　して　おるが、どうも　〜　堅雨の　言う　事が　解さ　ない　話を　ばかし　ます、しかし　それな　時子の　心に　もった　幼馴染の　音の　足音を　聞くのです、今日の　堅雨は、

どんな　男か　知、どうも　話が　同様な　ないとうて、家政婦で　話が　通じ　ません

学園二〇（銘柴並下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

と研究します、望月は高知で弟妹と
起ります、

十四、泥土みは十二月になります、
とまれ先ず一応北方の石炭覚也（スギヤ）
を記ふ（ふ）ことにしようと思ます、四月に入籍させて十九の年を
させて勉強のまゝ松山孫晴さます
結婚、北野（北野）孔夫（孔夫）観
十五、計算の時に製材材料を
とゝののがあります、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

共同経営者を雇傭する事にします、これで三人の職工は田辺トクルを脱退としスイッチを起します場所と手許を残者も脱退になります、日本私る様範的のストライキをやらーとします、所が大演説を開かしとした時、(職工の一人が不用意にも)田辺トクルの采配をつかみ封じた時、警官が発砲なので、田辺は小辛に留まります、高とて群衆は田辺を深く悪人なと映みます、それで田辺は演説をしなくた、場所は田辺を牢屋みとそっと破壊し初めます、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

演次男は解剖まで七、
母死は甚の聖妓なるにて七、母又は甚の(原)
悲の中に場合柔の材料が氛らめます 取れてあつた
ヲを私つたか 無くてゐます、
多くの題証を 用ひこんます七、甘の
ちつた 十山とお字は正当物です 母ます お金收
した 法律の権威と 名ばつた レットを 職工に配りた
した、 おれは 母の意味もなく 配
つたのでした、 翌年 まつから 三ヶ月 三ヶ、 母が
甘の出版人ないと 翌年 ち小ます七、

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

十一、山は地上へ足場をきずて行く時伯父皆敢んで林係人
になつて行きます、行く途中犯州の丸か沈没して二
人共死人でしまいます、鳴神もこれきり出来ず
仲と思います、

十六、鳴門な生活鈴内容御存なつて置きの方をと存ります、
日本は今工業の方重を次んで此まれ居ります、そして汎欧洲の各位を降く信じます、
音楽もう出来上は居ないで外国へ行くと云う事、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

十七、兄弟が外国へ行かうとする時、家札所だけ家宅
捜査が始まります、吾々もなか〳〵やかまし、しかし其の家を捜査は一ヶ月位掛ります
家宅捜査は中村と云ふ男と根事と云ふ男とがシンがおーへで追跡を仕てゐますから
なのです、

十八、兄弟は日本を去らうと思つてゐる矢先家宅捜査の件
が起つて立往生たなんが、やうく音無に隠てを拵し
て出て行きます、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

あの夜よな 夫の知ら三時将校見まります、
家には刑事と署長が来ました、刑事とは別
室で一寸話しました、夜るが明けた、別れる
旧家の院内捕縄がかけられてみるやうに見えます
た。夫れは幻でした、
帰る途中鳴動が聞ると鈴もたつれて行
くのに思ひました、夜あは心でお思添を感じながら
ら いろんな想像をします、
ナル、 家を捜索事件始 サレセツトは廃刊します、覚也

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

は死亡の為、死二十四の割合をもって、
左地家は田をドクトンと固係ありと見えて預かります、
預かります、
で、皆也を表よりする別刀を取消し、財産を差
時々は出掘えて全家計営を引おこります、時々は
なまへ、堅両は家動へ、ナオしと死差とは
両、宮つ、
二十、吾をは共同します、うこつの笠ん多くの屯が集
つてまて葬跡します、しかし翌朝皆な死んでみます、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止



穴りを見て驚んなのでとつて注きます、

二十一、覚也は紋若子を庵(廻)訪しま時、なをへ行く時子と
昨婚で恵美、妹子は 総てと 良介仕せよ、絶
若るは子供で まだ 恋をも 着もない、そんな子供
を 帯迎するのは 悪い、他は 紋若子が 覚也と 着す
日かまたなら 一緒に 深せよう とうって 良介も 昨婚届
はちが 去婦にはなない、届や 勘当な子二子之我
おとふ、しかし 覚也は 特子を 絶対に 別れます
曽倒し

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

二十二、貴せは祝老を迎鉢した西宮から四国まで行
きますか、いつも様一緒に参ります、尾行也者
につかれて居りますから、しかしいなの伊賀
とよう貴民は正右を外方に、ありがたく存じて、その先
に悲しい陰に伊賀の争たになります、伊賀は自
分の失必から貴せん同姓します、

二十三、ここのつ。

二十三年ドクトルの骨は墨自
卿ほへ着きます、葬式をします、位牌のうや
まるのまで秋葬が喧嘩をします、秘転なる自

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

我の強い人ばかりです、吾兄は中へ入っていろく
と嬉々れ役をします、

二十四　望のまゝ人をよせ　いろんなるから弁当に成るのが
嬉しゝます、始らく女を迎れて尼にならーとして葬却
等の御送院、お世ろれて大らとします、

二十五、吾々はどのゝん上ゝします、成功せふて回ります、
なるで時よゝなります、時の強によれば
時まで堅南と来
ゝなるゝみまで、川村堅南の松助松能

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

は早しから妻になってみたのでした、左地の母はそれを知ってあれのでした、
それが根岸病院での院中でしたなったのでした、
で時子は音吉に頼んで覚也を沖戸から呼よせて入院ふた今はもう
それは一ヶ月、
覚也も上京して時子の許をさり、すっかり全快しました、
三十二、覚也は音吉につれられて左地家を訪問しました、所が
結核子は危性結核性腹膜炎で此事は要かったのです、
翌日ところ〳〵せの宝くじ通されてみました、
とう〳〵スギ子の死に際し、お葬が、「左地見せ」と一口に言
はせます、そしてまもなく結核よはよはになります、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

スヤ子様より別にお手の手紙ご覧しまして、お喜び
申します。
皆さまは幸福の御事と上存じます。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

女

若い結婚した夫婦の悩み、

○ほま 熱烈な恋を捨てし結果 冷静な理性家となり、結婚式
はてか 夫婦となるなん夫れ別る、

○ナオミ、クリろう夫人、淡い恋と感じたのみ——

○須美子(スミコ)、強く恋せるれたが 通ったのを知らずして死する女

○貞子、自由恋愛の末であって、いつも夫の身の上を案じ通して
夫が、異地夫がふみをして他国に死んだ知らせを受ける、
覚悟はするが淋しい悲しい思いに暮らす、いよいよ
思うて修道院へ入るのをのって来る、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

# 宿命

○田舎トクにいて北京を出者、
中途にて更に一迂路としよ
うとしたは、何かもやもやから北京に心を苦しめ、
とうとう行動不能になって他国に移されて帰って来る、
○音無、私を見ていろんなことをした結果物笑となる、いつも良の
来性の不幸なすに妄想をつかす男、北京と我者となりきれず
若都会にも帰宿の不安から最後の待つ
場所にもと、あきらめてみる男、悲
○愛地、物語なくそれ自体を、思い北京とお越と一て
注意さえ、我をかき乱し、苦しみ抜れと自覚(迷)者となって(用いきろい
ない帰る、
○堅両、半田出発と共に帰京が
財産も田地も降りし
○慶子 宇宙一点張——
○高木 北京物と出し御後あり、経
○伊賀 悪い病れ家庭病、病身となった
生まる、

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
4止

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

別13
60
4止

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用